

岩手県における中学校サッカー指導者の指導の実態

鎌田 安久*・栗林 徹*・田嶋 幸三**

(1993年1月21日受理)

I 序論

日本サッカーの底辺は、近年の小学生サッカー人口の増加にともない、その拡大が著しく、この年齢層の競技人口は、マスメディアや(財)日本サッカー協会等の活動、そのみならず、サッカーそれ自体が持つ魅力と簡易性により、さらに増加することが予想されている¹⁾¹⁸⁾。しかし、その実力は、競技人口増加ほど上がっておらず、ドイツ等の欧州やブラジル等の南米諸国のサッカー先進国の代表チームと日本の代表チームを比較すると、未だにその実力には大きな差がある状況にある¹⁹⁾。逆に、練習日数や練習時間が多いことに起因したスポーツ障害の発生²⁾¹³⁾¹⁵⁾²¹⁾²³⁾や、高度な肉体的、精神的緊張を伴った練習を長期間にわたって課すことによる「バーンアウト・シンドローム」の問題も報告されている¹⁸⁾。これらの問題は、少年期の選手を指導する指導者の指導力や知識の不足、また指導教程の未確立が原因ではないかと考えられ¹⁾⁴⁾²⁰⁾、その問題の具体的把握のために、サッカー少年団に関する実態研究や少年の指導カリキュラムについての研究が行われており、大串ら¹⁴⁾は、サッカー少年団における全国トップレベルのチームは、練習頻度や時間が多いことを指摘し、また、田嶋ら¹⁸⁾は、ドイツの12歳以下のチームと比較して指導対象の人数が多すぎることや技術指導や戦術指導がドリブルに偏りすぎていることを報告している。また、少年を対象とした指導カリキュラムについては、(財)日本サッカー協会技術委員会¹⁷⁾の報告はあるが、成果をあげていない。その原因として指導カリキュラム運用すなわち内容の詳細な提示とその確実な実施が不足していることが指摘され、松本がサッカー指導の教程試案を考え、小学生指導の具体的内容を報告している⁸⁾⁹⁾¹¹⁾。このように、競技人口も増加してきたサッカー少年団に関しては、その問題の具体的把握のための実態研究が行われているが、一貫指導の観点から小学校の次の段階である中学校のサッカーにおける指導の実態についての報告はみあたらない。中学校のサッカーはサッカー少年団とは異なり、義務教育で学校体育の課外活動としての制約を受け、しかも内容がより専門的で、選手は精神的にも不安定な思春期の時期にあることなどから¹⁰⁾その実態を把握することは重要であると考えられる。また選手の実力が向上しないのは、指導に問題があるからだ¹⁶⁾ともいわれていることから、その指導の問題点を明確にし、改善の検討をする事は重要であると考えられる。

そこで本研究では、今回、岩手県内の各地域から選抜された指導者16名と、同じく各地域から選抜された中学1年生220名を対象に、アンケート調査を行い、岩手県中学校サッカーのトップの指導者の指導状況や指導内容、将来有望な中学1年生サッカー選手の各所属チームにお

* 岩手大学教育学部

** 立教大学一般教育部

ける練習状況や意識を把握し、岩手県における中学校サッカーの指導の現状と問題点を明確にすることを目的とした。

II 方法

1. 対象

第1回岩手県中学1年生サッカー大会に参加した、岩手県内14地域(1.盛岡A, 2.盛岡B, 3.遠野 4.紫波 5.花巻 6.和賀 7.釜石 8.西磐井 9.岩手 10.胆江 11.宮古・下北 12.二戸 13.気仙A 14.気仙B)からそれぞれ選抜された指導者16名,選手220名であった。

2. 調査時期および方法・内容

1989年8月11日・12日に実施された第1回岩手県中学1年生サッカー大会の期間中に、大会役員を通じて各地域選抜チームの代表に直接質問紙による調査を依頼し回収した。回収率は、指導者・中学生ともに100%であった。調査内容は、田嶋ら¹⁸⁾の質問紙を参考にした以下の項目であった。A.指導者を対象とした調査項目：①氏名 ②年齢 ③職業 ④選手歴 ⑤指導経験年数 ⑥サッカー指導者資格(旧資格制度) ⑦1週間の指導回数 ⑧1回の指導時間 ⑨1回に指導する選手数 ⑩一般的指導上の留意点 ⑪指導上の目標 ⑫技術指導の強調点 ⑬突破時における戦術の強調点 ⑭指導に対する報酬 B.中学生を対象とした調査項目：①氏名 ②年齢 ③サッカー歴 ④サッカーを始めた動機 ⑤1週間の練習回数 ⑥部活動以外でのサッカーの練習状況 ⑦1回の練習時間 ⑧練習の楽しさ ⑨習得したい技術 ⑩突破時における戦術の選択 ⑪サッカーでの目標 ⑫サッカーの観戦

III 結果及び考察

1. 中学校サッカー指導者の経歴

表1・2・3・4・5・6は、各地域選抜チームの指導者の年齢・職種・選手歴・指導歴・指導者資格・指導報酬について示している。指導者の年齢は、26～30歳が5人、31～35歳が6人と参加指導者の約7割を占めていた。指導者の職種については、全員が教師であり、このことは中学校のサッカー部活動が、義務教育の課外活動の一貫であり、学校外の人材の登用が困難であることが考えられた。各指導者の選手歴は、国体選手を経験しているものが3名、大学・高校での部活動経験者が8名、経験無しが3名であり、高いレベルのサッカーを経験することによって、優れたサッカーのイメージを持った指導者が、選抜チームのスタッフに少ないことが伺えた。指導歴は、1年から10年以上と幅があり、4年から7年が5割を占めていた。サッカーの指導資格については、有資格者が3名で、無資格者が10名であり、中学校選抜チームのスタッフでは、有資格者が少ない現状が明らかになった。また、指導に対する報酬については、報酬を得ているものは皆無で、これは対象者がすべて教師であり、課外活動の一貫として指導しているためであると考えられる。

これらのことから、今回、岩手県内各地域から選出された中学選抜チームの指導者は、中学校のサッカー部活動が、義務教育の課外活動の一貫であり、学校外の人材の登用が困難であることからすべて学校教師であり、また、選出された中学選抜チームの指導者ではあるが、高いレベルのサッカー経験者は少なく、サッカー指導の有資格者も少ないことが認められた。

表1 指導者の年齢

年齢	人数	%
25歳以下	0	0
26-30歳	5	31.3
31-35歳	6	37.5
36-40歳	2	12.5
41歳以上	2	12.5
無回答	1	6.2
計	16	100

表2 指導者の職種

年齢	人数	%
教師	16	100
無回答	0	0
計	16	100

表3 指導者のサッカー選手歴

選手歴	人数	%
全日本代表選手	0	0
日本リーグ選手	0	0
国体選手	3	18.75
部活動(大・高)	8	50
サッカー経験無し	3	18.75
無回答	2	12.5
計	16	100

表4 指導者のサッカー指導経験年数

指導歴	人数	%
1年以下	1	6.25
1-3年	1	6.25
3-5年	5	31.25
5-10年	4	25
10年以上	1	6.25
無回答	4	25
計	16	100

表5 指導者のサッカー指導資格の取得状況

資格	人数	%
上級コーチ	0	0
公認コーチ	0	0
リーダー	3	18.75
取得予定	2	12.5
取得意志無し	8	50
無回答	3	18.75
計	16	100

表6 指導者の指導に対する報酬

指導の報酬	人数	%
得ている	0	0
全く得ていない	16	100
実費だけ得ている	0	0
無回答	0	0
計	16	100

2. 中学生の選手歴

表7・8は、中学選抜選手のサッカー歴・サッカー開始動機について示している。中学1年生の選抜選手のサッカー歴は、1年以上が8割以上で、小学生サッカー選手の競技人口の増加を裏付ける結果であった。しかし、一方で、選抜選手の中に、サッカー歴が0.5年未満で中学入学後サッカーを始めたと考えられる者が16%おり、時間をかけてボール扱いがスキルフルになることが望ましい少年時代¹⁾の選手に、中学校から始めたばかりの選手が3カ月程度で選抜選手として選出されていることは、各地域における小学生サッカーの普及レベルの格差や体力・体格重視の選考基準に問題があるのではないかと推測される。また、サッカーを始めた動機は、サッカーが楽しそうだったからと回答した選手が152人と全体の7割を占めていた。

表7 選手のサッカー歴

サッカー歴	人数	%
0.5年未満	35	15.9
0.5-1年	8	3.6
1-2年	14	6.4
2-3年	32	14.5
3-4年	42	19.2
4-5年	39	17.7
5-6年	27	12.3
6年以上	19	8.6
無回答	4	1.8
計	220	100

表8 選手のサッカーを始めた動機

開始動機	人数	%
両親の勧め	3	1.4
先生の勧め	6	2.7
兄弟、友達の影響	46	20.9
サッカーが楽しそう	152	69.1
選手がカッコイイ	7	3.2
その他	2	0.9
無回答	4	1.8
計	220	100

3. 指導者の指導量と選手の練習量、及び指導効率

表9・10及び図1は、各自のチームにおける指導者の1週間の指導頻度と、選手の1週間の練習頻度を示している。指導者の指導頻度については、1週間に6回指導すると回答した者が4人と全体の25%で最も多く、次が1週間に7回指導すると回答した3人の19%、以下毎週5回が2人、毎週4回・3回・2回・1回が各1人で、平均5回/週という結果であった。これに対し、選手の練習の頻度は、1週間に7回、1週間に6回練習すると回答した者がそれぞれ90人と全体の40%ずつで最も多く、以下毎週5回18人・4回10人・3回8人・2回3人・1回1人で、平均6回/週という結果であった。これらのことから、選ばれた指導者の1週間の指導頻度と、選手の1週間の練習頻度は、ともに6~7回が多く、平均では選抜選手の練習頻度が指導頻度よりも多いことが認められた。この結果は、ドイツの13~14歳のサッカー選手の指導教程²⁾や松本¹¹⁾の指導教程試案で提唱されている指導頻度の「毎週3~5回」よりも多い傾向にあることが認められた。

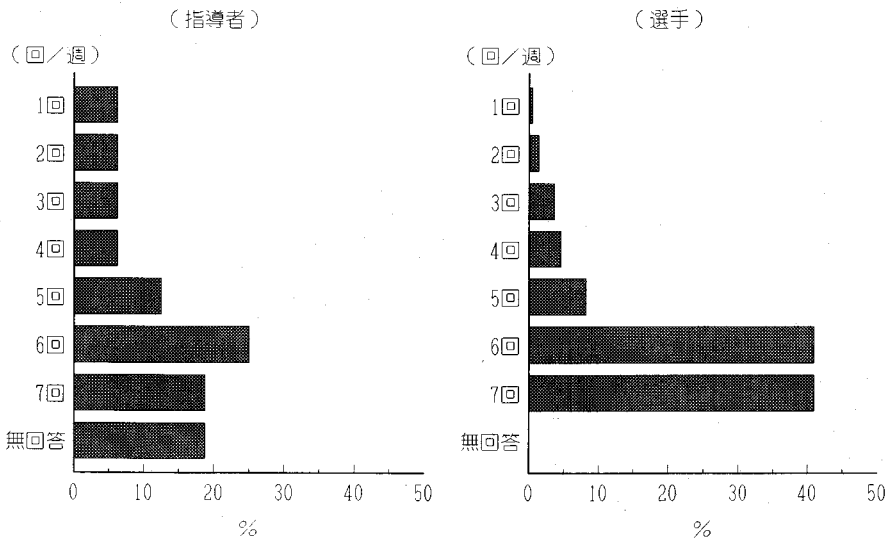


図1 1週間における指導者の指導頻度と選手の練習頻度

表9 指導者の1週間の指導頻度

回/週	人数	%
1回	1	6.25
2回	1	6.25
3回	1	6.25
4回	1	6.25
5回	2	12.5
6回	4	25
7回	3	18.75
無回答	3	18.75
計	16	100

表10 選手の1週間の練習頻度

回/週	人数	%
1回	1	0.5
2回	3	1.4
3回	8	3.6
4回	10	4.5
5回	18	8.2
6回	90	40.9
7回	90	40.9
無回答	0	0
計	220	100

また、表11・12及び図2は、各自のチームにおける指導者の1回の指導時間と、選手の1回の練習時間を示している。指導者の1回の指導時間については、120～150分と回答した者が9人と全体の56%で最も多く、次が1回に150～180分と回答した5人の31%、そして90～120分と回答した2人の13%で、平均141分/回という結果であった。これに対し、選手の1回の練習時間は、120～150分と回答した者が171人と全体の78%で最も多く、以下90～120分20人・60～90分14人・60分未満15人で、平均122分/回という結果であった。このことから、選抜された指導者の1回の指導時間と、選手の1回の練習時間は、ともに120分～150分が多い結果となった。この結果は、ドイツの13～14歳のサッカー選手の指導教程²⁾や松本¹¹⁾の指導教程試案で提唱されている指導時間の「1回につき90～120分間」よりも多い傾向にあることが認められた。

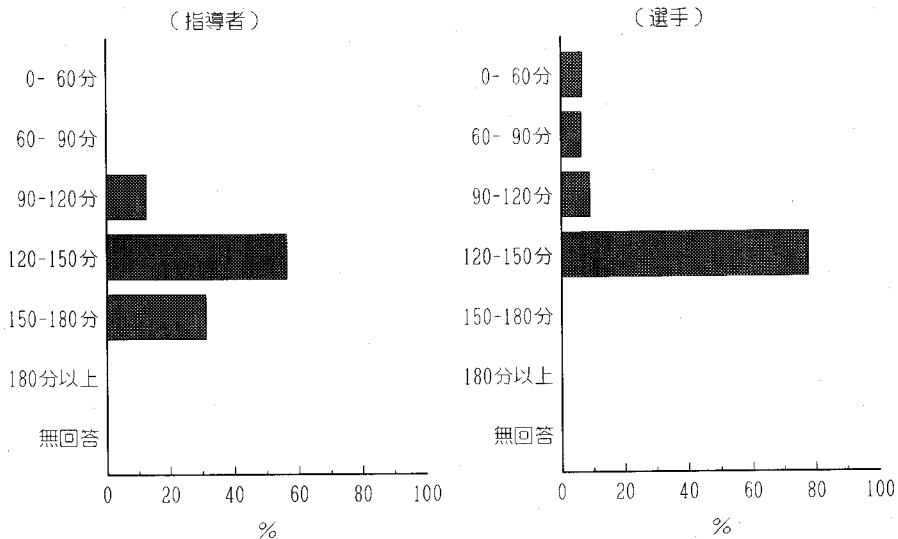


図2 指導者の1回の指導時間と選手の1回の練習時間

表 11 指導者の1回の指導時間

時間	人数	%
0-60分	0	0
60-90分	0	0
90-120分	2	12.5
120-150分	9	56.25
150-180分	5	31.25
180分以上	0	0
無回答	0	0
計	16	100

表 12 選手の1回の練習時間

時間	人数	%
0-60分	15	6.8
60-90分	14	6.4
90-120分	20	9.1
120-150分	171	77.7
150分以上	0	0
無回答	0	0
計	220	100

表 13 は、部活動以外にサッカーの練習をしている状況について示している。最も多かったのは、「ときどき」と回答した者が 108 人と全体の 49%、次が「よく」と回答した者 68 人の 31% 以下、「いつもよく」は 26 人で 12%、「あまりしない」は 17 人で 8% という結果であった。このことから主体的で、自己の自由な発想でやれるサッカーの時間を持つ選手があまり多くないことが推測される。

表 13 選手の部活動以外でのサッカーの練習状況

部活動以外サッカー	人数	%
いつもよく	26	11.8
よく	68	30.9
ときどき	108	49.1
あまりしない	17	7.7
無回答	1	0.5
計	220	100

表 14 指導者が1回に指導する選手数

人数	人数	%
20人未満	0	0
20-29人	0	0
30-39人	4	25
40-49人	5	31.25
50人以上	5	31.25
無回答	2	12.5
計	16	100

表 14 は、指導者の指導対象選手数を示している。指導者が 1 回に指導している選手数は、50 人以上と回答した者が 5 人、40~49 人と回答した者が 5 人と、それぞれ全体の 31% ずつを占め最も多く、次が 30~39 人の 4 人で、指導対象選手数の平均は 43 人という結果であった。このことから、指導者が 1 回に指導している選手の数はその約 6 割が 40 人以上であり、少なくとも 30 人以上の選手を常時指導していることが認められた。この結果は、ドイツでは指導者が 1 回に指導している選手数は、25 人未満であるという松本⁷⁾の報告や、松本¹¹⁾が指導教程試案で、「多くても 30 人程度」と示している人数よりも多いことから、選手 1 人当たりへの指導時間は少なく指導効率が低いことが推測され、選手が拘束される時間だけが長くなっているのではないかと考えられる²⁴⁾。このことは、指導量が多いことや、部活動以外でのより主体的にやれるサッカーの時間をいつももつ選手が多くないことにも影響していると考えられる。

以上のことから、岩手県内の各地域の選抜チームの指導者の指導量及び選手の練習量は、「毎週 6~7 回・1 回につき 120~150 分間」で、ドイツの 13~14 歳のサッカー選手の指導教程²⁵⁾や、松本¹¹⁾の指導教程試案で提唱されている基準の「毎週 3~5 回・1 回につき 90~120 分間」より

も多い傾向にあることが認められた。また、指導の効率の観点からは、指導者が1回に指導している選手の数は、ドイツの状況や松本の指導教程試案よりも多く、指導効率が低いことが推測される。このことは、指導量や練習量が多い実態や、部活動以外の選手の自由意志によるサッカーの練習時間が、多くない実態の原因の一つではないかと考えられる。また、指導時間からみた量は適度な場合でも、1回に指導している選手の数が多くことや、指導者が中学教師という職種から、課外活動の指導時間それ自体が少ない場合も考えられ、この年代に必要なグループ戦術やパーフェクトスキル等の内容¹¹⁾についての指導不足も推測される。

さらに、このように1チームの選手の人数が多過ぎることは、公式試合という日頃の練習の成果を発揮でき、技量をあげモチベーションを高めるためにはなくてはならない経験の場に、出場するチャンスを極めて少なくすることが推測され、このことから各地域において部員数に応じたチーム数やそのレベルに応じた公式戦を増やすことができるように今後検討する必要があることが示唆される。

これらのことは、13歳前後は1人1人の身体的・精神的発達に大きな差がある時期であることから²⁾、技術・戦術の指導効率をあげるためや、練習のやり過ぎによる障害やバーンアウトを未然に防ぐため¹²⁾¹³⁾¹⁵⁾²³⁾²⁴⁾にも、指導者が1人1人の選手に目の行き届く選手数で適度な量を指導していけるよう改善していかなければならないことを示唆していると考えられる。

4. 指導者の指導上の留意点及び目標と選手の練習の楽しさ及び目標

表15は、指導者の一般的指導上の留意点を示している。一般的指導上の留意点については、「社会性を養う」と回答した者が7人と全体の44%で最も多く、次が「楽しさを教える」と回答した4人の25%、「健康体をつくる」が1人という結果であった。また、表15は、選手の練習の楽しさについて示しており、「いつも楽しい」と回答した者が101人と全体の46%で最も多く、次が「楽しくない時もある」と回答した91人の41%、以下「ときどき楽しい」が23人、「あまり楽しくない」が4人という結果であった。このことから、岩手県内の各地域の選抜チームの指導者には、指導上楽しさを教えることに留意している者は多くなかったが、選手の約5割は、楽しさをあまり留意して指導されてなくても、サッカーがもつ本来の楽しさをいつも感じていることが推測される。しかし、残りの5割がいつも楽しさを感じていない点については、指導の量や効率と関連した問題としてその原因を究明しなければならないことが考えられる。

表15 指導者の一般的指導上の留意点

留意点	人数	%
社会性を養う	7	43.75
健康体をつくる	1	6.25
楽しさを教える	4	25
その他	0	0
無回答	4	25
計	16	100

表16 選手の練習における楽しさ

楽しさ	人数	%
いつも楽しい	101	45.8
楽しくない時もある	91	41.4
ときどき楽しい	23	10.5
あまり楽しくない	4	1.8
無回答	1	0.5
計	220	100

表17・18及び図3は、指導者の目標と選手の目標について示している。指導者の目標につい

では、「よい選手を育てる」と回答した者が8人と全体の50%で最も多く、次が「楽しく仲良く」と回答した3人の19%、以下「試合に勝つ」1人、「その他」が1人という結果であった。これに対して、選手の目標は、「大会で優勝すること」と回答した者が65人と全体の30%、次が「プロサッカー選手になること」と回答した63人の29%、そして「チームの正選手になること」が60人の27%と、この3項目がほぼ同じ割合を占め、「友達と仲良く」は24人の11%という結果であった。これらのことから、指導者の「よい選手を育てる」という目標と、選手の優秀な選手になりたいという目標とが一致している傾向が認められた。

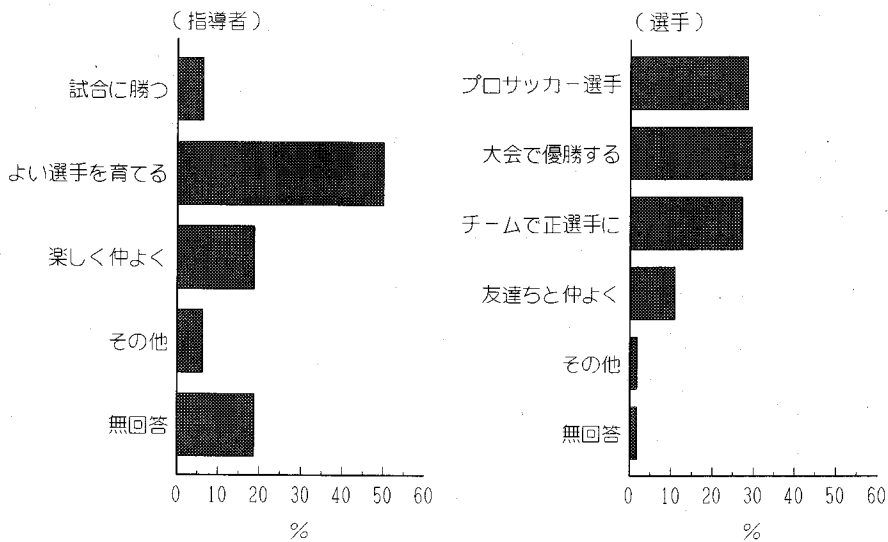


図3 指導者の指導目標と選手のサッカーでの目標

表 17. 指導者の指導上の目標

目標	人数	%
試合に勝つ	1	6.25
よい選手を育てる	8	50
楽しく仲よく	3	18.75
その他	1	6.25
無回答	3	18.75
計	16	100

表 18. 選手のサッカーでの目標

目標	人数	%
プロサッカー選手	63	28.6
大会で優勝する	65	29.6
チームで正選手に	60	27.3
友達と仲よく	24	10.9
その他	4	1.8
無回答	4	1.8
計	220	100

5. 技術向上に関する指導者の強調点と選手の興味

表 19・20 及び図 4 は、技術向上に関する指導者の強調点と選手の興味を示している。技術向上に関する指導者の強調点については、「すべて同じに強調」と回答した者が6人と全体の38%で最も多く、次が「ドリブル」、「トラップ」がそれぞれ3人、以下「シュート」、「パス」、「そ

の他」が1人ずつという結果であった。技術向上に関する選手の興味については、最もうまくなりたい技術は「ドリブル」と回答した者が81人と全体の37%で最も多く、次が「シュート」と回答した52人の24%、以下「トラップ」が29人、「パス」が27人、「その他」が27人という結果であった。このことから、岩手県内の各地域の選抜チームの指導者には、田嶋ら¹⁸⁾のドイツの報告や松本¹¹⁾の指導教程試案同様、技術向上に関する強調点について、「すべて同じに強調」する者が多くみられたが、一部の指導者には偏って「ドリブル」や「シュート」を強調しているものがあることも認められた。また、中学選抜選手の技術向上に関する興味については、小学生についての報告¹⁸⁾²⁷⁾同様、「ドリブル」が最もうまくなりたい技術であることが認められた。

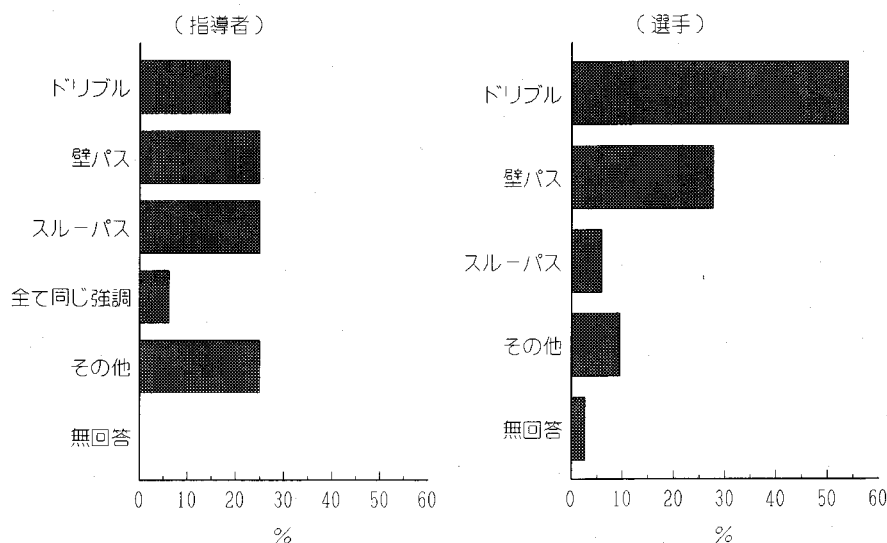


図4 サッカーの技術向上に関する指導者の強調点と選手の興味

表19 指導者の技術向上に関する強調点

強調点	人数	%
ドリブル	3	18.75
シュート	1	6.25
パス	1	6.25
トラップ	3	18.75
全て同じに強調	6	37.5
その他	1	6.25
無回答	4	1.8
計	16	100

表20 選手が最も向上させたい技術

技術	人数	%
ドリブル	81	36.8
シュート	52	23.6
パス	27	12.3
トラップ	29	13.2
その他	27	12.3
無回答	4	1.8
計	220	100

6. 突破戦術に関する指導者の強調点と選手の選択

表21・22及び図5は、突破戦術に関する指導者の強調点と選手の選択を示している。突破戦術に関する指導者の強調点については、「壁パス」「スルーパス」と回答した者がそれぞれ4人

と全体の25%ずつ、次が「ドリブル」で3人の19%、「すべて同じに強調」が1人、「その他」が4人という結果であった。突破戦術に関する選手の選択については、突破の時に最も使う戦術は「ドリブル」と回答した者が119人と全体の54%で最も多く、次が「壁パス」と回答した61人の28%、以下「スルーパス」が13人、「その他」が21人という結果であった。これらのことから、岩手県内の各地域の選抜チームの指導者には、突破戦術に関する強調点について、「壁パス」「スルーパス」と同程度「ドリブル」を強調する者が認められたが、これに対し、選抜選手では、突破時の戦術に「ドリブル」を最も使う者が全体の半数以上を占めていることが認められ、「壁パス」や「スルーパス」等のグループ戦術に関する指導効果が高くないことが推察される。田嶋ら¹⁸⁾は、ドイツでは小学生の年代で、最もうまくなりたい技術は日本同様「ドリブル」をあげる選手が多いにもかかわらず、突破の時に最も使う戦術は「壁パス」をあげる選手が多く、ドイツの指導の強調点と一致しており、その指導効果が高いことを報告している。

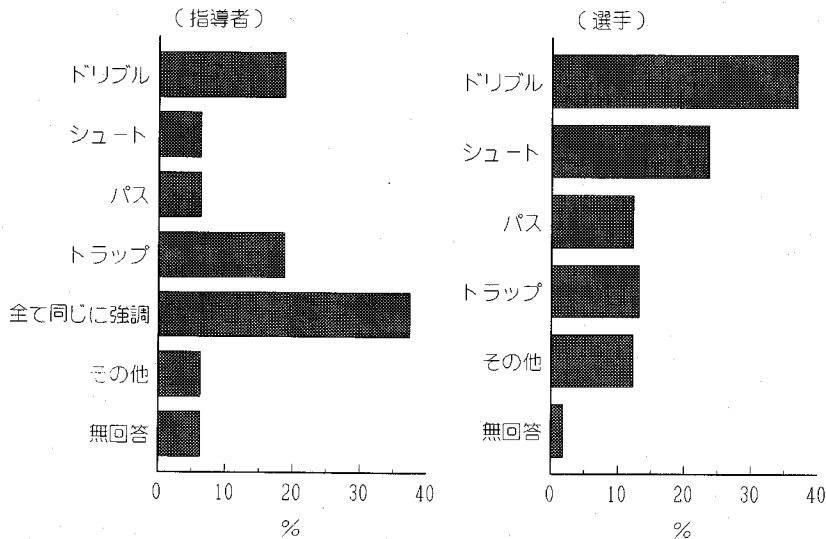


図5 サッカーの突破戦術に関する指導者の強調点と選手の選択

表 21 指導者の突破戦術に関する強調点

突破戦術	人数	%
ドリブル	3	18.75
壁パス	4	25
スルーパス	4	25
全て同じ強調	1	6.25
その他	4	25
無回答	4	25
計	16	100

表 22. 選手が突破時に最も使う戦術

突破戦術	人数	%
ドリブル	119	54.2
壁パス	61	27.7
スルーパス	13	5.9
その他	21	9.5
無回答	6	2.7
計	220	100

このような中学1年生選抜選手にドリブル突破の意識が強いことや選抜チームの指導者の中

にドリブルを強調する者がいるという実態は、中学生の年代ではグループ戦術の指導が必要という報告¹¹⁾や、日本のユースには、ドリブルなど自己中心的プレーが多く戦術的能力が低いという報告³⁾⁶⁾²³⁾、さらには近代サッカーにおいてドリブルよりも素早いパスやトラップが重視されるという指摘⁴⁾に反する結果であることから、岩手県の中学サッカー指導者は適時性に応じた指導で、特により戦術指導を重視して選手の戦術の理解を深めさせることが重要であると考えられる。

7. サッカーの試合観戦の実態

表 23 は、選抜選手のサッカーの試合観戦の実態に関する結果を示している。サッカーの試合を「テレビでよく見る」と回答した者が 133 人と全体の 60% で最も多く、次が「時々テレビで見る」と回答した 62 人の 28%、以下「よく競技場へ行く」が 17 人、「ほとんど見ない」が 8 人という結果であった。このことから、岩手県内の各地域の選抜選手は、そのほとんどがテレビを見て試合を観戦しているという結果であった。これは、日本の小学生の調査結果と同様の傾向であった²⁵⁾。ドイツでの調査では、小学生の 9 割が「よく競技場へ行く」という結果¹⁸⁾であり、日本では、身近にサッカーの競技場が少なく、地域に根ざした試合やレベルの高い試合が普及していないことが影響しているのではないかと考えられる。また、試合の観戦が「テレビを通して」が多いことから、試合観戦の機会は放送回数に制限され、さらにテレビは視野も制限されて臨場感に欠けるため、優れたプレーのイメージネーションを十分養うこと²⁶⁾が困難であろうと推測される。

表 23 選手のサッカーの試合観戦に関する実態

試合観戦	人数	%
よく競技場へ行く	17	7.72
テレビでよく見る	133	60.5
時々テレビで見る	62	28.2
ほとんど見ない	8	3.6
無回答	0	0
計	220	100

IV まとめ

本研究は、岩手県中学校サッカーのトップの指導者の指導状況や指導内容、及び将来有望な中学 1 年生サッカー選手の各所属チームにおける練習状況や意識を把握し、岩手県における中学校サッカーの指導の現状と問題点を明確にするため、岩手県内の各地域から選抜された指導者 16 名と、同じく各地域から選抜された中学 1 年生 220 名を対象に、アンケート調査を実施することで以下の結果を得た。

- (1) 岩手県内各地域から選出された中学選抜チームの指導者は、中学校のサッカー部活動が、義務教育の課外活動の一貫であり、学校外の人材の登用が困難であることからすべて学校教師であり、また、選出された中学選抜チームの指導者ではあるが、高いレベル

- のサッカー経験者は少なく、サッカー指導の有資格者も少なかった。
- (2) 選抜選手の中に、中学入学後サッカーを始めたと考えられる者が16%おり、時間をかけてボール扱いがスキルフルになることが望ましい少年時代の選手に、サッカーを始めて3ヶ月程度の者が選抜選手として選出されていることから、岩手県各地域における小学生サッカーの普及のレベル格差や体力・体格重視の選考基準に問題があるのではないかと推察される。
 - (3) 各地域の選抜チームの指導者の指導量及び選手の練習量は、毎週6～7回・1回につき120～150分間という傾向であり、このことは、先行研究の報告で提唱されている指導量よりも多い傾向にあることが、認められた。
 - (4) 各地域の指導者が1回に指導している選手の数は、平均43人で、少なくとも30人以上の選手を常時指導していることが認められ、このことから、選手1人当たりへの指導時間は少なく指導効率が低いことが推測される。また1チームの選手数が多過ぎることで、公式試合に出場するチャンスが少なくなることが推察され、各地域において部員数に応じたチーム数やそのレベルに応じた公式戦を増やすことができるように今後検討する必要があることが示唆される。
 - (5) サッカーにおける指導者の目標と選手の目標については、指導者の「よい選手を育てる」という目標は、選手の優秀な選手になりたいという目標と一致している傾向が認められた。
 - (6) 各地域の指導者には、技術向上に関する強調点について、すべて同じに強調する者が多くみられたが、一部の指導者には偏って「ドリブル」や「シュート」を強調している者も認められた。また、選抜選手が最もうまくなりたい技術については「ドリブル」であることが認められた。
 - (7) 各地域の指導者には、突破戦術に関する強調点について、「壁パス」「スルーパス」と同程度「ドリブル」を強調する者がみられた。これに対し、選抜選手では、突破時の戦術に「ドリブル」を最も使う者が全体の半数以上を占め、このことから「壁パス」や「スルーパス」等のグループ戦術に関する指導効果が高くないことが推察され、今後戦術指導の充実が必要であることが考えられる。
 - (8) 各地域の選抜選手は、そのほとんどがテレビを見てサッカーの試合を観戦し、競技場へ観戦に行く機会は少ないことが認められ、このことは、身近にサッカーの競技場が少なく、地域に根ざした試合やレベルの高い試合が普及していないことが影響しているのではないかと考えられる。

参考文献

- 1) Bisanz.G., G.Gerisch: FUSSBALL-Training-Technik-Taktik-, rororo, 1991.
- 2) Bisanz.G., H.Koppel, H.Osieck, B.Vogts: Fussball-Lehrplan 2 -Kinder- und Jugendtraining Grundlagen-, BLV Verlagsgesellschaft, 1985.
- 3) Breitner.P.: 我がドイツサッカー, これからのサッカー, Fussball, Vol.4, 1986.
- 4) Csanadi.A.: チャナディーのサッカー —技術・戦術編一, ベースボール・マガジン社, p.396, 1982.

- 5) Hughes.C.: サッカー戦術とチームワーク, ベースボール・マガジン社, p.66, 1973.
- 6) 加藤 久: サッカー —基本プレーと勝つための攻防テクニク—, p.57, 1986.
- 7) 松本育夫: サッカー —西ドイツにおけるユース, ジュニア育成についての研修, 日本体育協会スポーツ指導者在外研修事業研修報告書, pp.24-29, 1983.
- 8) 松本光弘: 少年サッカー指導の課題, トレーニング・ジャーナル, Vol.11, pp.79-82, 1988.
- 9) 松本光弘: 達成感を味わわせる指導の工夫 —サッカー(小学校)—, 健康と体力, Vol.11, pp.59-62, 1988.
- 10) 松本光弘: 適時性からみた少年サッカークラブ指導の問題点, 学校体育, Vol.11, pp.60-66, 1988.
- 11) 松本光弘: サッカーの指導過程に関する試案, 筑波大学体育科学系紀要, Vol.12, pp.247-260, 1989.
- 12) 森本哲郎, 大島 襄, 高木俊男, 池田舜一, 鍋島和夫, 塩野 潔, 深谷 茂, 若山待久, 河野照茂: サッカーによるスポーツ障害—膝関節の障害—, J.J. SPORTS SCI., Vol.2(11), pp.848-855, 1983.
- 13) 中嶋寛之: 発育期のスポーツによる膝関節損傷の発生機転について 整形・災害外科, Vol.24, pp.1605-1610, 1981.
- 14) 大串哲郎, 小宮喜久, 田代力也, 深倉和明: ヤング・フットボーラーの実態調査—特に指導者, 指導上の問題を中心に—, 昭和50年度ヤング・フットボーラーに関する調査報告書, Vol.1(24), 1977.
- 15) 大島 襄, 鍋島和夫, 堀田哲爾, 藤田一郎: 座談会” スポーツ障害なしの少年サッカーを目指して”, J.J. SPORTS SCI., Vol.2(11), pp.864-880, 1983.
- 16) Ooft, M. J.: 日本サッカー再建, 報知新聞, p.4 1986.11.28
- 17) 塩谷英樹: 少年層の充実をトップの強化に, サッカー JFA NEWS, Vol.5, pp.342-349, 1979.
- 18) 田嶋幸三 小野剛: 西ドイツと日本における指導者と少年選手に関する比較研究, 第7回サッカー医・科学研究会報告書, pp.80-87, 1988.
- 19) 田嶋幸三: 子供の競技種目別トレーニング —その現状と問題点— サッカーのトレーニング, J.J. SPORTS SCI., Vol.8(7), pp.439-442, 1989.
- 20) 田中純二: 子どもが戦術, 戦法から学ぶもの, 体育科教育, Vol.31(4), pp.71-73, 1983.
- 21) 田中純二: 体育指導, コーチの側からみた問題点, 臨床スポーツ医学, Vol.4(7), pp.779-784, 1987.
- 22) 田中和久: サッカーの戦術, 不味堂出版, 1981.
- 23) 戸苅晴彦: ケガの発生要因と対策, トレーニング・ジャーナル, Vol.8, pp.62-64, 1986.
- 24) 戸苅晴彦: 少年期の体力トレーニング, トレーニング・ジャーナル, Vol.4, pp.86-88, 1988.
- 25) 富岡義雄, 小宮喜久, 田代力也, 深倉和明: ヤングフットボーラーに対する実態調査 —サッカーに対する意識を中心に—, 昭和51年度ヤングフットボーラーに関する調査報告書, pp.25-39, 1977.
- 26) 牛木素吉郎: 見よう見まねは, すばらしい, 体育科教育, Vol.7 pp.32-35, 1984.
- 27) Wade.A.: イングランド・サッカー教程, 浅見俊雄訳, ベースボール・マガジン社, 1974.

サッカー指導者に関する調査

(氏名は任意にお書き下さい。選択肢のある項目では1つだけ選んで下さい。)

1. 氏名
 2. 生年月日 昭 年 月 日 才
 3. 職業
 4. 選手歴
 - 1) 全日本代表であった。
 - 2) 日本リーグでプレーした。
 - 3) 国体に出場した。
 - 4) 大学、高校でサッカー部に所属した。
 - 5) サッカー経験なし
 - 6) その他 ()
 5. 何年間少年サッカーを指導されていますか。

年 ヶ月
 6. サッカー指導者資格をお持ちですか。
 - 1) 上級コーチを持っている。
 - 2) 公認コーチを持っている。
 - 3) リーダー資格を持っている。
 - 4) 今後取るつもりである。
 - 5) 取るつもりがない。
 7. 一週間に何回子供達を指導していますか。

回/週
 8. 一回の練習時間はどれくらいですか。

約 時間 分
 9. 一回の練習で何人の選手を指導していますか。

約 人
 10. 一般的指導上の留意点
 - 1) サッカーを通して社会性を養っている。
 - 2) サッカーを通して健康なからだをつくる。
 - 3) サッカーの楽しさを教えている。
 - 4) その他 ()
 11. 指導上の目標
 - 1) リーグ戦、トーナメントに勝つことである。
 - 2) 良い選手を育てることである。
 - 3) 楽しく、仲良くさせることである。
 - 4) その他 ()
 12. 技術的指導で一番強調しているものは何ですか。
 - 1) パス
 - 2) シュート
 - 3) ドリブル
 - 4) トラップ
 - 5) 全て同じように強調している。
 - 6) その他 ()
 13. 突破の手段として一番強調していることは何ですか。
 - 1) ドリブル
 - 2) 壁パス
 - 3) スルーパス
 - 4) 全て同じように強調している。
 - 5) その他 ()
 14. あなたはサッカーの指導に対しての報酬を得ていますか。
 - 1) 得ている。
 - 2) 全く得ていない。
 - 3) 実費だけは得ている。
- ※どうもありがとうございました

少年サッカー選手に関する調査

(1つの質問には1つだけ答えを書いて下さい。)

- 1、氏名 _____ 2、生年月日 昭 年 月 日生 才
- 3、サッカーを始めて何年になりますか。
_____ 年 ____ 月
- 4、どうしてサッカーを始めたのですか。
1) 両親にすすめられて。 2) 先生、コーチにすすめられて。
3) 兄弟や友達がしていたから。 4) サッカーが楽しそうだから。
5) サッカー選手達がかっこいいから。
- 5、あなたは一週間に何回練習をしますか。
1) 1回 2) 2回 3) 3回 4) 4回 5) 5回
6) 6回 7) 7回
- 6、あなたはクラブの練習のほかにサッカーをしますか。
1) いつもよくしている。 2) よくしている。
3) ときどきしている。 4) あまりしない。
- 7、1回の練習時間はどれくらいですか。
1) 30分 2) 45分 3) 1時間 4) 1時間15分
5) 1時間30分 6) 1時間45分 7) 2時間～
- 8、練習はいつも楽しいですか。
1) いつも楽しい。 2) 楽しくないときもある。
3) ときどき、楽しい。 4) あまり楽しくない。
- 9、技術的に1番うまくなりたいことは何ですか。
1) パス 2) シュート 3) ドリブル 4) トラップ
5) その他 (_____)
- 10、相手を抜くときに1番使うものは何ですか。
1) ドリブル 2) カベパス 3) スルーパス
4) その他 (_____)
- 11、あなたのサッカーでの目標は何ですか。
1) プロサッカー選手になること。
2) リーグ戦、トーナメントで優勝すること。
3) チームでレギュラーになること。
4) 友達と仲良くサッカーができればいい。
5) その他 (_____)
- 12、あなたは、どれくらいサッカーの試合を見にいきますか。
1) よく、競技場やサッカー場へ見に行く。
2) テレビの試合はよく見る。
3) ときどき、テレビの試合を見る。
4) ほとんど見ない。

どうもありがとうございました。